



鎌倉三田会会報

第30号

2021(令和3)年10月15日発行
発行人 久保田陽彦
鎌倉市小町2-11-19(株)豊島屋内
<https://kamakura-mitakai.jp/>

会長挨拶

会長 久保田陽彦

日頃から鎌倉三田会活動にご協力頂き感謝申し上げます。コロナ禍において自由な活動が出来ずに困惑しておりますが、変わりゆく状況を素早く判断し、今すべきことを、信念をもって行うことが肝要で、みなさまのご理解を頂戴したく存じます。この状況下、令和4年度の総会を旧来通り行うことは難しいと考え、来年度も書面による総会を考えておりますことをお許し下さいませ。

10月17日に行われる連合三田会も御存じの通りリモートによる開催になりました。鎌倉三田会では毎年大会券を購入しておりましたが、本年度は購入する枚数を減らし減額分プラスアルファで昨年度同様「慶應義塾大学病院医療支援資金」へ寄付させて頂きました。また、大会券に関しましては記念品と交換し、その記念品は次年度以降の懇親会にて使用するつもりでございます。

塾とのかかわりについて、この秋より「まちのキャンパスプロジェクト」としてSFCを中心とした塾生が鎌倉を舞台にして学ぶプロジェクトが立ち上がります。伊藤公平新塾長のもと、鎌倉と塾がより近い関係になれることを期待しております。この事についてはプロジェクトの中心的な存在の田中浩也教授よりご寄稿載しましたのでここにご紹介いたします。

いつまで続くかわからないコロナというこの状況、ワクチン接種のこともふまえ、皆様におかれましてはくれぐれも健康にご留意下さいますようお願い申し上げます。

産学官民が協力し、まちぐるみで鎌倉を学びの場としていくプロジェクト

慶應義塾大学SFC研究所ソーシャル・ファブリケーション・ラボ田中浩也教授と鎌倉市が取り組む、鎌倉版「スマートシティ構想」の実現に向けた連携いよいよ始まる！

連載第1回 イン트로ダクション

慶應義塾大学環境情報学部教授の田中浩也と申します。湘南藤沢キャンパス(SFC)に着任して16年、3Dプリンタなどを使ったものづくりの研究を行ってきました。SFCのメディアセンターには、20台以上の3Dプリンタが設置されていますが、私が鎌倉に住みはじめた2011年、扇ガ谷に3Dプリンタやレーザーカッターなどを使える市民工房「ファブラボ鎌倉」を立ち上げ、地域の方々とも交流をはじめました。研究室の学生たちに、自然の溢れるSFCと、歴史や文化ある鎌倉という2つの場所を移動するよう促した結果、3Dプリンタという道具の「新しさ」に溺れるだけではなく、それがどう「社会に役立つのか」を思考できる環境がうまれました。ファブラボ鎌倉の運営は、その後一般社団法人に引き継いでもらいましたが、その後もまちとの関係は続いており、卒業後鎌倉に居を構える学生も増えてきています。

(2ページに続く)

そうして10年、また新しいことをはじめようと考えていたところに、突然起こったのがコロナウイルスの蔓延です。2020年春学期から、授業はリモートで行われるようになり、私自身もほとんどの仕事を、鎌倉の自宅で行うようになりました。最初の1年は、オンラインで授業を成り立たせることだけで、学生も教員も必死でしたが、それもだいたい慣れて来ました。ただ、すでに1年半、大学の状況はほとんど変わっていません。たまたに、ほとんど学生のいないキャンパスにいくと、不思議な気持ちに囚われます。コロナ前までは当たり前すぎて考えたことのなかった「キャンパスとは何か？」という問いが自然と頭に浮かんできます。キャンパスとは、授業をするだけの場所ではなく、出会いの場所であり、思索の場所であり、実験の場所でもあり、通う場所でもありました。どれも、オンラインだけの大学生活からは消えてしまっている体験です。そしてふと、これまで大学のキャンパスが担ってきた役割の一部を「鎌倉のまち」が担うことができないか？と思ったのです。そこから市民のみなさま、鎌倉企業の方々、市役所、慶應義塾大学で立ち上げてきたのが「まちのキャンパス」プロジェクト (<https://kamakura.sfc.keio.ac.jp/>) です。次回、このプロジェクトの詳細をご紹介しますと思います。

※鎌倉まちのキャンパスプロジェクトでは個人、団体、法人を問わず、慶應義塾大学へのご寄付を受け賜ります。皆様のご芳志は次年度以降の活動に有効に活用させていただきます。ご興味を持たれた方は、info@kamakura.sfc.keio.ac.jp までご連絡いただければと思います。

寄稿 塾 - 私の学び舎⑩

塾野球部34年ぶり日本一に寄せて 「リベンジ」

慶大野球部元監督 鬼嶋 一司（昭53経）

2020年11月10日、私は鍋をはさんで塾野球部 堀井哲也監督と向き合っていた。その2日前の早慶戦最終戦。9回2死走者無しからのまさかの逆転ホームランで目の前の優勝を宿敵早稲田にさらわれた。私も放送席で言葉を失った。ドラフト1位指名を受けた4年生エース木澤を2年生投手に替えての敗戦だっただけに、敗軍の将への風当たりはなおさら痛烈だったであろう。勝負につきものとはいえ、スポーツの明暗は時に残酷さを伴う。そしてその一球は選手たちの人生さえ大きく左右する。

鬱憤を吐き出してほしい。そんな思いから食事に誘った。しかし、そんな思いは全くの杞憂に終わった。「先輩もよくわかっている通り、この世界は勝てば官軍、負ければ賊軍」ですから。笑っていた。悔しさを押し殺し笑っていたのかもしれない。いや笑っていた。この男の勝負師としての凄さを見た様な思いであった。そしてその言葉は彼が歩んできた生き様そのものであろう。

塾野球部では、enjoy baseballなる言葉が最近頻繁に使われている。この言葉を好んで用いていたのは日本の野球史に残る昭和35年早慶6連戦を率いた故 前田祐吉監督である。堀井監督も前田監督の教え子である。かつて前田祐吉氏にenjoy baseballの語源をうかがったことがある。返ってきた言葉は次の様なものであったと鮮明に覚えている。「塾野球部の歴史をひもといてもenjoy baseballという言葉の起源は明らかではない。ハワイから来られた第2代監督腰本寿氏が持ち込んだという説もあるがそれは違う。彼はthinking baseballという言葉を使った。ただ私流のenjoy baseballの解釈はこうだ。

第一に勝利すること。第二に勝つためにいろいろと工夫をし技術を磨くこと。第三に何よりも全員が精一杯のプレーをすること。不誠実な姿勢は周りを不快にする。まさにその三つがenjoy baseballの意味だと教えられた。

日本一までの道程は険しく厳しいものであったろう。とりわけ昨秋の敗戦は選手たちにとってトラウマともなりかねない痛恨の傷となった。

そんな中、強い意志と真のenjoy baseballの実践で頂点に立った。日本一とともに何よりも昨秋のリーグ戦のリベンジを果たしてくれた事は塾員として、野球部OBとして感慨無量の一言に尽きる。

福澤先生と海舟の微妙な関係 その2 ～中津の持つ土地の力～

高山みな子（昭60文）

（鎌倉三田会会員 編集部注：勝海舟玄孫）

福澤先生と海舟に共通するのは、蘭学、つまり西洋の学問に打ち込んだことである。母校のHPにある先生の年表には21歳の時「兄・三之助にすすめられ蘭学を志して長崎に出る」とある。海舟も20歳の頃、剣術の師、島田虎之助のすすめで蘭学を学び始めた。既に直心影流の免許皆伝を受けた海舟は島田の代稽古で大名屋敷を回っていた。そんな弟子に島田はなぜ蘭学をすすめたのか。自分の後を継がせるでも独立させて道場を持たせてもいいはずだ。

どの本も「島田のすすめで蘭学を志した」というたった1行で済ませているが、どうも腑に落ちない。私はできるだけ海舟に関わりのある地には足を運ぶようにしている。その土地の空気や光、山や川、海的位置関係、人々、食、それらを自分で見て感じることは新たな発見につながるが多い。そこで中津へ行ってみた。百聞は一見に如かず、中津がどれほど蘭学に力を入れていたのかよくわかった。

中津藩三代藩主・奥平昌鹿は、オランダ語を話せたという薩摩藩八代藩主・島津重豪とは蘭学仲間でいわゆる蘭癖大名と呼ばれた一人である。

18世紀半ばに京都で行われた人体解剖はその後、中津で発展していくのだが、昌鹿の応援もあって前野良沢は小浜藩の杉田玄白らと『解体新書』を翻訳した。辞書がない中での翻訳は困難を極めた。五代藩主・昌高（重豪次男）は実父や昌鹿から影響を受け、オランダ語をよく理解し、日常生活にもオランダ様式を取り入れていたという。そのため日蘭対訳辞書が必要であると痛感し、長崎生まれの阿蘭陀通詞や家臣たちに命じ約7千語をいろは順に並べ、さらに天文、地理など19部門に分けて収録した『蘭語訳撰』、その続編と言われる『中津バスタード辞書』を編纂させた。

---蘭学の香る地 中津の今--- 福澤先生旧宅&島田道場&中津城

中津には現在も村上、大江の2つの医家が保存公開されており、上記の書籍類や当時の医療器具など蘭学、医療関係の史料を見ることができて大変興味深い。この村上医家の目と鼻の先に島田が修行した道場がある。村上医家には高野長英を土蔵にかくまったという言い伝えと、長英がオランダ語で書いた「水滴は石をも穿つ」という書も残る。中津城からおおよそ東へ400mで福澤先生旧宅、南西へ500mで島田の道場、二人は蘭学の香りのぷんぷんする地で育ったのである。

福澤先生が蘭学を志すのも、島田が海舟に蘭学を勧めるのも中津の持つ土地の力なのかもしれない。先生と海舟の間で中津が話題にのぼって話が盛り上がりつつもおかしくないと思うのだが、そんな話を耳にしたこともないのは、当たり前過ぎていちいち書いたりしなかったからか、二人は雑談もしないほど剣呑な間柄だったのだろうか。

余談だが、重豪は幕末に活躍した斉彬の曾祖父で、利発な斉彬を非常に可愛がった。シーボルトが江戸に来た時は斉彬を伴って会見した。現在の源頼朝の墓を整えたのも重豪である。（続く）



山内静夫先輩を悼む

幹事長 岡林 馨（昭41政・平20文）

立秋の過ぎた8月15日、鎌倉三田会の長老、山内静夫先輩が逝去された。享年96歳。戦中から戦後の混乱のさなかに塾に学び、学徒動員を経て、昭和22年に経済学部を卒業、映画の黄金時代に松竹の名プロデューサーとして巨匠小津安二郎監督の『早春』から『秋刀魚の味』にいたるまで、多くの名画を世に送り出した。鎌倉ケーブルテレビ社長の頃に上梓された『松竹大船撮影所覚え書』に、映画人としての活躍が偲ばれ、また最晩年に至るまで、地元ミニコミ誌『鎌倉朝日』連載の「谷戸の風」に書かれた滋味あふれるエッセイに、生粋の鎌倉っ子として地元への深い愛情がうかがえる。

加えて長年、鎌倉三田会の役員として半世紀以上にわたり、本会の歩みを支えた方でもあり、慶應義塾創立百五十年を記念し、福澤先生ゆかりの大分県中津や、開塾の地である築地鉄砲洲を訪れた「福澤ツアー」の団長として我々後輩たちにお供いただいたのも記憶に新しく、今に続く「丘の上句会」の発足も山内先輩のご尽力なくしてはあり得ないことであった。

その端正で穏やかなお人柄は誰からも愛され、鎌倉同人会長、鎌倉文学館長、鎌倉市芸術文化振興財団理事長など、古都鎌倉の文化の維持発展を担ってこられた生涯であったといっていよう。今はただご冥福を祈るばかりである。

事務局便り

クラスタの発生を見ない鎌倉三田会において、塾の方針に従いながら親睦会をまとめて下さっている世話人はじめ、準じて下さっている皆様に感謝を申し上げます。

幹事会の承認を受け、足立良作幹事が監事に就任致しました。

楽しみにしておりましたサマーフェスティバルが中止となりました。

長寿記念品は順次送付申し上げる予定であります。

新入会員のご紹介 順不同

阿部 晶人君（平10環）	平 正太君（令1商）	三神 道功君（平7商）
南 徹君（昭43経）	三宅 恵美子君（平19総政）	田中 浩也君（特・SFC教授）
鬼嶋 一司君（昭53経）		

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

訃 報

鎌田 徹也君（昭16経） 中島 慶一君（昭44経） 山内 静夫君（昭22経）
石川 智庸君（昭30政） 堀越 慈君（昭39法）
（会員の方で事務局にご連絡いただいた方をご報告させていただいております。）

編集後記 賛否両論の中で開催された TOKYO2020 オリパラ。10名の塾生・塾員が活躍しました。アーチェリーの武藤弘樹選手は男子団体で日本初となる表彰台に上がりました。この TOKYO2020 の表彰台は、慶應義塾メールマガジンによると、本紙で登場の田中浩也先生が製造設計を担当されたそうです。日吉キャンパスでは英国代表チームの事前キャンプ受入れ等、塾の多方面での関わりは嬉しいことでした。持てる力を振り絞り記録に挑む選手達、特にパラアスリートがひたむきに競技に臨む姿が自国開催だからこそテレビで多く放映され、感動しました。（瀧永）